

帝国日本の農業試験研究 華北産業科学研究所・華北農事試験場の展開と終焉

山本晴彦 著, 農林統計出版 発行,
2015年3月31日, 402 pp. 定価 4,200円+税

山本晴彦著『満洲の農業試験研究史』, 『帝国日本の気象観測ネットワーク—満洲・関東州—』に続く3冊目の書籍である。まず, 本書の目次を示す。

まえがき

序章 課題と方法

1章 華北における農業試験研究機関

1 青島徳華高等学堂農林科, 2 青島守備軍民部李村農事試験場, 3 支那における農業試験研究機関

2章 対支文化事業

1 対支文化事業特別会計法の制定, 2 対支文化事業の展開, 3 対支文化事業特別会計法の運用, 4 東亜同文会と対支文化事業

3章 中日学院における高等農業部と附属農事試験場の設立

1 中日学院, 2 中日学院高級農業部の設立と運営, 3 中日学院附属農事試験場の設立と運営, 4 中日学院附属農事試験場の華北産業科学研究所への変遷

4章 華北産業科学研究所の設立計画

1 北支那産業科学研究所の設置計画, 2 華北産業科学研究所の創立と始動, 3 華北産業科学研究所の内地への引き揚げ, 4 華北産業科学研究所の北京移転, 5 青島支場, 済南支部, 中央農事試験場の開設, 6 中央農事試験場の支那側への移管問題

5章 華北産業科学研究所・華北農業試験場の概要と変遷

1 本場と支場等の概要, 2 北京本場, 3 支場, 分場, 試験地, 4 原々種圃・原種圃, 5 農業技術訓練部

6章 華北産業科学研究所・華北農事試験場における農業試験研究の概要

1 耕種科, 2 農芸化学科, 3 病虫科, 4 畜産科, 5 林業科, 6 家畜防疫科, 7 農業水利科

7章 華北産業科学研究所・華北農業試験場等で刊行された農業試験研究に関する資料

1 はじめに, 2 華北産業科学研究所・華北農事試験場で刊行された農業試験研究に関する資料, 3 華北農業・華北農業, 4 まとめ

8章 農業試験場に従事した研究者

1 歴代所長の略歴と変遷, 2 職員の構成と変遷, 3 職員の採用

9章 華北産業科学研究所・華北農事試験場の予算

1 年度予算の概要, 2 昭和11年度から20年度までの収支状況の推移, 3 規則や諸規定から見る支出の概要

10章 通州棉作試験場と中央鉄道農場

1 通縣棉作試験場の設立, 2 通縣棉作試験場と昌黎果園芸試験場の試験研究, 3 通州農事試験場の概要, 4 中央鉄道農場の概要, 5 鉄道農場の新設と変遷

11章 華北産業科学研究所・華北農事試験場の中国系技術職員

1 中国系技術職員の採用, 2 若手研究者の戦中と戦後

12章 終戦時における華北産業科学研究所の接收・留用と産研会の活動

1 産研会の結成と活動, 2 産研会報から見る終戦時の状況

終章

1 耕種課 主任・寺田慎一氏のご子息へのヒアリング, 2 太原支場 副研究員・林 健一氏のご子息へのヒアリング, 3 華北農報告, 4 中支産業科学研究所の設立構想, 5 華北産業科学研究所の歌

参考文献, 付録, 索引

なお, 各章に参考文献の項目があるが省略した。

本書は戦前・戦中期の華北地方における日本が対支文化事業の一環として創立した農業試験研究機関の華北産業科学研究所・華北農事試験場について昭和11(1936)年9月の創立から20(1945)年8月の終戦(10年間の展開から終焉)までを多くの公文書, 書簡等を用いて紹介するとともに, 当時刊行された学術資料を用いて研究員等により得られた研究成果を明らかにしている。

本著者は, まず終戦直後に北京在住の研究者有志により取りまとめられた『華北調査研究機関業績総合調査』に基づいて占領下・北京での調査研究を機関別に外観し, 北京大学と華北産業科学研究所, 北京大学農学院の教育体制と農村経済研究所の研究活動, 特に華北乾地農法と古農書研究について紹介している。最後に研究者の帰国とその後の状況が記されている。

序章に始まり, 1~11章までは目次通りかなり詳しく項目立をして解説している。そのため, 記述内容が表題として理解できるかと思われる。

終章には国内外で活躍された2名の主要研究者のご子息へのヒアリング内容が記述されている。

本著者の記述によると, 「華北産業科学研究所は, 終戦直前の昭和19年には1000人を超える定員にまで増大し, 華系職員が日系職員を上回るまでに拡充を遂げていた。また, 終戦後, 主任等の研究員は技術留用者として中国に残留し, また華系職員も戦後の新中国での農業試験研究の推進への大きな原動力となったのも, まぎれもない事実である。本書では華北産業科学研究所・華北農事試験場による農学系研究者や技術者の人材育成の側面から「正の遺産」としての評価も試みる。」としている。評者においても複雑ではあるが, 頷ける評価であると思っている。

1章では, 日本の接收以前にドイツが実施した植林の重用, 農業気象観測の実施, および麦類, 高粱, 黍, 玉蜀黍等々の導入・試作試験について記述している。その後の日本による農林業の試験研究について, 耕種, 農芸化学, 病虫, 畜産, 林業, 家畜防疫, 農業水利の記述にあるように, 簡単ではあるが研究内容が示されている。そして半乾燥地での麦類, 高粱, 黍, 玉蜀黍, 雑穀, 棉花, 水稻, 麻, 煙草等々の研究報告もある。

<http://www.agrmet.jp/sk/2015/C-1.pdf>

2015年6月12日 掲載

Copyright 2015, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

なお、評者は防風林・防風垣の文献収集で、農業技術研究所・林業試験場の図書館で 1880～1950 年の古い文献を探していた時に、満洲の低温・半乾燥地で、相当高く評価される試験研究業績を見た懐かしい記憶があった。

さて本著者は、とにかく広範囲に、本著者の興味、特に必要と感じられる項目について、最大限調査し、記述している。先行の書籍においてもであるが、本著者の取りまとめにおける多大な時間の投入、執念とも思える努力には、心底感心している。今後とも、関連業績が出版されることを祈念している。

最後に本書を一読されること、そして資料として図書館等に収納され、利用されることを願っている。

(九州大学名誉教授・北海道大学農学研究院研究員 真木太一)